20.9.21 朝日 群馬版

尾瀬の山小屋 歓迎と不安

記者報告

今季の尾瀬は、新型コロナウイルスの影響で異例ずくめとなった。せっけんの使用を解禁するなど山小屋は感染防止対策を徹底しているが、先の見えないコロナ禍に不安も続く。入山者が大幅に減ったとみられる一方で、近隣県から訪れた若い家族連れが目立った。（張春穎）

マスクの着用を求める看板を設置した山の鼻小屋＝いずれも尾瀬・山ノ鼻

至仏山荘の受付。透明なシートがつるされ、密にならないように客の立ち位置を示す印も床に示されていた 至食堂は外側に向かって座席が配置され、消毒液も置かれていた

「楽しんでほしい」「夜、発熱したら」

「山小屋を開ける限り、安全と楽しさを提供したい」。片品村にある主要登山口・鳩待峠から歩いて約1時間の山ノ鼻にある至仏山荘。マスクと手袋を身につける星野良太支配人(37)は消毒と換気で忙しい日々を送ってきた。

群馬、福島、新潟、栃木の4県にまたがり、標高1400㍍を超える尾瀬。今季は新型コロナの影響で尾瀬保護財団や環境省が入山自粛を求め、群馬県側はミズバショウの見頃が過ぎた5月下旬から、福島県側は7月から入山が出来るように。山小屋の営業開始は感染防止策の準備のために7月1日以降となった。

至仏山荘では受付時に検温。せっけんによる手洗いやマスク着用など、客への協力依頼をまとめた紙や、紙のシーツと枕カバーを配る。収容人数を定員の半分程度に抑え、食堂の椅子は間隔を空けて外側に向くように配置。食事や入浴もグループ単位に分散した。

「ウイルスは見えないだけに疲れもあるが、気は緩めない」と星野支配人。

至仏山荘を含め尾瀬で5軒の山小屋を運営する東京パワーテクノロジー尾瀬林業事業所の小暮義隆所長(51)によると、1軒は今季当初から休業しており、4軒の宿泊者数は例年の3割ほど。入山者数も例年の半分ほどで日帰りが多いとみている。7月22日に始まった政府の観光支援策「GoTo トラベル」では東京都民を対象から外す期間が続き、感染リスクの高い中高年のハイカーが入山を控えたため、想定以上に入山者が増えるような混乱はなかったという。

一方、県内や栃木、埼玉などから訪れた若い家族連れが目立ったという。「短い夏休みに、自然と親しめる身近な尾瀬が注目されたことは良かった」と小暮所長。尾瀬はこれから草紅葉が美しい季節を迎えるだけに「秋の尾瀬も楽しんでほしい」と話す。

ただ、不安と隣り合わせのシーズンであることには変わりない。

至仏山荘の近くにある山の鼻小屋は、萩原聖彦さん(45)らの家族経営。「消毒、消毒、消毒です」と掃除に時間を費やしてきた。

接触を減らすために食券機を導入したり、布団は数日空けて使ったり、清潔さを保つ工夫をしてきた。

「お客さんに来てほしいけど、夜に熱を出されたらどうしようと不安になる」。コロナ禍の収束が見えないだけに「これから世の中がどうなるのか」。

尾瀬を訪れた東京都の会社員井上久幸さん(53)は消毒品やシーツを持参してきた。「観光することで迷惑をかけてしまうのではと葛藤があります」

消毒用品不足や医療機関がないことを理由に今季の休業を決めた山小屋も少なくない。尾瀬保護財団の8月25日現在のまとめでは、山小屋や休憩所の計28施設のうち11施設が営業を休止している。

感染回避 救助態勢に課題

救助態勢も大きな課題だ。自力でハイカーが歩けなければ救助隊員が背負うのが基本だが、感染の疑いがある場合には消防は接触を避けるために担架で運ぶことにした。

実際にそうした例はなかったが、山岳地帯の尾瀬では過酷な救助があった。

8月上旬、燧ケ岳(標高2356㍍)へ通じる長英新道でハイカーが足を骨折。夕方に連絡を受けた福島県の南会津地方広域消防本部の山岳救助隊10人ほどが急行した。

ハイカーの元に着いたのは日没直後の午後7時過ぎ。そこから隊員が数分交代で背負って、暗闇と豪雨で足場が不安定な中を下山した。ハイカーが普通に歩く時間の3倍近くかけて午後9時40分ごろに救急車が待つ沼山峠にたどり着いたという。現場で指揮した星光喜さん(52)は「使命感以外にはない」と語る。

望んでけがをする人はいないが、尾瀬保護財団は施設の休止などで従来通りの遭難救助が難しいとして、入山時に注意するよう呼びかけている。